付篇

光市小周防相ヶ迫出土の土製経容器

横山　成己

1．資料の由来

まずは扉写真（写真79）をご覧頂きたい。現在、山口大学埋蔵文化財資料館には山口県熊毛郡周防村[註1]（現：光市）大字小周防小字相ヶ迫の地にて発掘された土製経容器１組と、土師器皿15点が収蔵されている。本資料に関しては平成13年にその存在を断片的に公開している[註2]が、平成16年に刊行された『山口県史 資料編考古２』では残念ながらその集成に漏れており、後に刊行された県内経塚遺跡の調査報告においても相ヶ迫出土資料が認知されていない状況にある[註3]。全ては長年にわたり正式報告を行わなかった当館の怠慢に因を発することであり、記してお詫び申し上げるとともに、遅ればせながらここにその責を果たしたいと思う。

本資料には由来書とも呼べる記録紙が1枚付随している（写真80）。以下にその内容を記す。

【表面】

遺物名　有蓋円筒状壺及び皿

発見地　山口縣熊毛郡周防村大字小周防字下小周防小字相ヶ□（迫）

発見者～発掘者名　弘　律之進

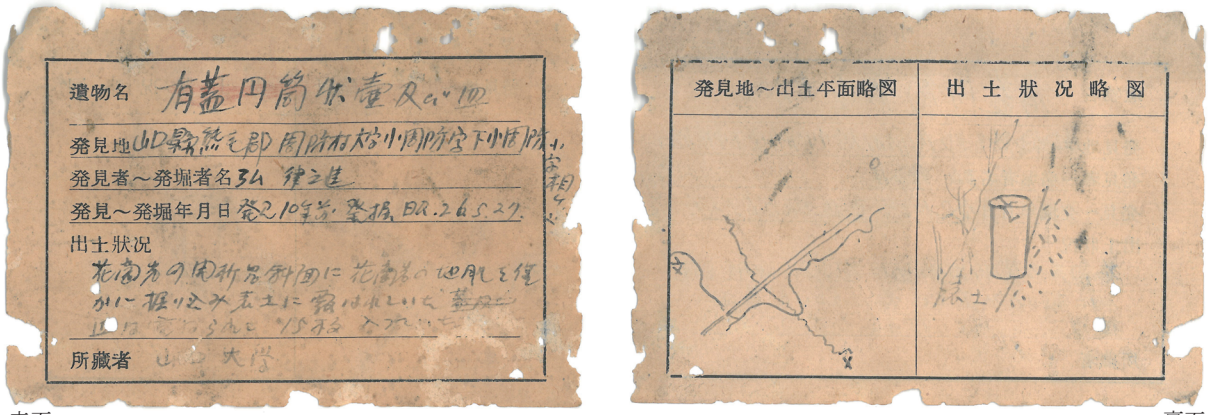
発見～発掘年月日　発見10年前　発掘□（昭？）.26.5.27.

出土状況　花崗岩の開折谷斜面に花崗岩の地肌を僅かに掘り込み表土に露はれていた　~~蓋及び~~皿は重ねられて15枚入っていた

所蔵者　山口大学

上記の内容でやや不可解であるのは「発見～発掘年月日」に関する記述である。この記述に若干の考察を加えてみよう。

昭和25年から28年にかけて、島田川流域の広範囲を対象に山口大学島田川遺跡学術調査団による発掘調査および踏査が実施されていたことは周知の通りである。その成果報告書である『島田川 周防島田川流域の遺跡調査研究報告』（以下『島田川』）には小周防相ヶ迫に近接する周防村大字下周防中郷遺跡の調査成果報告が掲載されるとともに、「周防村の遺物散布地と包含層」として、次の一文が掲載されている。「既述の遺跡のほかに原始時代の集落址と推察せられる遺物散布地と包含層が、昭和26年５月27日の踏査によって明らかになった[註4]」つまり、記録紙に発掘日として記されている昭和26年５月27日とは、山口大学島田川遺跡学術調査団が周防村の踏査を実施していたまさに当日なのである[註5]。



表面　　裏面

写真 80　資料由来記録紙

この事実から推察すると、以下の経緯が復元されよう。

１．昭和16年頃、弘律之進氏により小周防相ヶ迫の開折谷斜面に土製経容器が発見される。[註6]

２．10年後の昭和26年５月27日、周防村の踏査に訪れた山口大学島田川遺跡調査団に土製経容器の存在が伝えられる。

３．同日、調査団により土製経容器が発掘される。

４．山口大学に土製経容器・土師器皿が収蔵されるも、『島田川』に報告されず現在に至る。

２．小周防の歴史環境と出土地の特定

現在光市北部に位置する小周防の地は、岩国市周東町に源を発し、玖珂盆地、熊毛低地を経て光市で周防灘に流入する二級河川島田川の中流域に該当する。周防（小周防）の名が示すとおり、この地は周芳（周防）国造の本拠と推定されており、沙麽（佐波）県に周芳国府が新置された後に古（小）周防と呼ばれるようになったと目されている。[註7] また、周芳国造の部内においては新羅より帰化した秦氏の存在が指摘されているが、[註8] 小周防の南に隣接する大字立野の北端、島田川が西に蛇行する左岸の長徳寺山と呼ばれる標高約60ｍの低丘陵の南方斜面中腹に長徳寺山古墳第１号墳がある。古墳は昭和40年(1965)に発掘調査が実施され、玄室長3.1ｍ以上、奥壁幅1.45ｍの横穴式石室墳であることが確認された。玄室内からは土師器坏２点、須恵器高台付坏身２点、須恵器坏蓋２点、圭頭大刀１点、刀子１点等が出土しており、[註9] その内容から６世紀末に築造され８世紀代まで追葬が行われた墳墓と推定されているが、注目されるのは同一丘陵上に所在している長徳寺が所蔵する新羅系陶質土器の有蓋高坏[註10]である。この資料は、現在では消滅したが寺の付近にあった古墳から出土したものと伝えられており、４基程度存在したとされる長徳寺山古墳群の被葬者像を知る上で重要な資料となっている。

律令制度下での小周防には、当初周防国に設置された五郡（大島郡･熊毛郡･都濃郡･佐波郡･吉敷郡）の内の熊毛郡家（郡衙）が設けられたと考えられており、郡家移設後[註11]も平安時代を通して国衙領であったが、鎌倉時代に至ると内藤氏が地頭として長く領知することとなり、国衙領としての実質は失われたとされている。

さて、本資料の出土地点に関しては「山口縣熊毛郡周防村大字小周防字下小周防小字相ヶ迫」という発見地名と、記録紙（写真80）の裏面に描かれた「発見地～出土平面略図」の限られた手掛かりしか与えられていない。現在の小字地図で見ると、相ヶ迫は島田川左岸に熊毛丘陵から派生する小起状丘陵地内に位置する（写真81）。記録紙に記された通りこの丘陵は花崗岩質の岩盤が複雑に浸食されており、狭小な開折谷が不定方向に入り組んでいる。実際に相ヶ迫の地に立つと、東西南北の視界が完全に遮断されており（写真82）、多くの場合眺望の良い景勝の地が選ばれる経塚の立地としては極めて特異な状況と言える（図34）。僅かに相ヶ迫の北西に近接する「奥ノ坊」という小字名が経塚との関連を想像させるに過ぎない。

次に記録紙に関して見ると、小周防周辺の略地図と推定される。「×」が出土地を示すのであろう。右上－左下に引かれた二重線や蛇行する一本線は道を示すと考えられることから、「文」印が特定できれば出土地への道程が推察できるものと思われた。現在、小周防北部の島田川左岸に光市立周防小学校が存在することから、[註12] これを「文」印と見て調査を進めたが、資料出土時の昭和26年には前述した長徳寺付近にも周防中学校が存在していたことが判明したため、[註13] 道程の確定には至らなかった。小字相ヶ迫の踏査も実施したが、塚状遺構も発見できていない。もっとも、記録紙の出土状況を読むと「谷斜面に露出」となっており、元来塚状の施設がなかったか、発見時には封土が流失した状況であった

1　相ヶ迫経塚推定地
2　立野経塚推定地
3　宮本古墳
4　大浴遺跡（散布地：弥生）
5　長徳寺山古墳
6　長徳寺遺跡
7　中郷遺跡（散布地：弥生～古墳）

図 34　小周防相ヶ迫位置図

写真 81　遺跡地遠景（北西から）

写真 82　小周防相ヶ迫の遺跡推定地（南東から）

ものと思われる。現状としては、小字相ヶ迫の北縁を北西－南東方向に伸びる山道周辺をその推定地として挙げるに止めたい。

ところで、旧周防村には旧来「立野経塚」として知られる経塚遺跡が知られているが、今日まで遺跡分布図等に詳細な位置が特定されていない。よってここに合わせて報告を行う。

立野経塚の発見は古く、大正６年（1917）８月中旬に地元出身の京都法科大学の学生である鬼武義彦氏と土地所有者等により発掘され、鬼武氏により出土品が京都文科大学考古学研究室に持ち込まれた[註14]。同年12月には島田貞彦氏により『考古学雑誌』上に報告されるに至る[註15]が、ここにその内容を要約しよう。

【経塚の位置】

山口県周防国熊毛郡周防村字立野堂ノ森通山正次郎氏所有山林で島田川上流約二里（約８㎞）の標高約100ｍの小山山頂

【経塚の構造】

高さ五尺（約1.5ｍ）、周囲六七間（約11～13ｍ）の封土があり、発掘は封土の北東部から横穴を掘り進める形で行われた。封土内部には径五六寸（約15～18㎝）の自然石が積み重ねられており、その下底中央に鋳銅製経筒が安置されていたが、身と蓋の間に素焼製の壺が覆い被されていた。経筒の下部より白磁片が、経筒の下底一尺（約30㎝）の下層に和鏡四面が散在していた。

まず問題となるのは経塚の位置についてである。島田氏報告には「字立野堂ノ森」とされているが、現在「堂ノ森」という小字名は伝えられていない。現在伝わる字名を見ると、相ヶ迫の南西約500ｍの丘陵先端地に「堂ノ下」という小字名があり、西に接して「安森」という小字名も確認できる。「堂ノ森」は両者が混同した結果と考えられ、現在でも小字堂ノ下の丘陵下に通山姓の家屋が存在することから見ても、当地の標高100ｍ前後の丘陵頂部が立野経塚推定地と見なして良かろう。

出土遺物については、当初京都文科大学考古学教室に保管されたようであるが、柏本秋生氏が指摘するように、山口大学人文学部考古学研究室に所蔵されている鋳銅製経筒が立野経塚出土品と確認される他は散逸してしまったようである[註16]。

経塚の構造に関しては、横掘りによる発掘ということもあってか不可解な部分の多い報告内容となっている。特に素焼製壺については、島田氏報告では「高さ約七寸、径約五寸の素焼製にして経筒の蓋と身との間に置かれしものなり」とされているが、報告に示された実測図によると、身蓋を合わせた鋳銅製経筒のサイズが全高6.7寸、蓋径4.75寸であることから見て、素焼製壺は経筒全体を覆う外容器であった可能性が高い[註17]。

以上が相ヶ迫経塚と立野経塚の遺跡地に関する調査報告となる。両者とも推定地を提示するに止まったが、今後更なる特定作業が進み、遺跡地図等に明示されることを切に願う次第である。

３．遺物

【土製経容器】（図35、写真83、表６）

土製経容器は、平底円筒形の身と、つまみ付き被せ蓋からなる。蓋は約1/2が、身は上半部の約1/2が欠失している。両者とも内外面共に風化が全く見られない状態と言って良く、製作当時の趣をそのまま伝えている。

a. 土製経容器蓋

復元口径21.2㎝、器高3.8㎝の轆轤成形品である。天井部は外縁から中央部に向けて緩やかに凹んで

おり、中央に直径4.0㎝の扁平なボタン形つまみが付けられている。口縁は緩やかに外反し、端部は丁寧に面取りされている。また、天井部外面には板状圧痕が観察されることから、撮みが付加される前段階に板上で半乾燥が行われたものと思われる。

b. 土製経容器

復元口径19.4㎝、底部径20.4㎝、器高39.9㎝の円筒形を呈する。法量に比して極めて薄づくりである底部外周に、ほぼ垂直に粘土を積み上げ体部を形成している。器壁の厚みは約1㎝であり、２㎝から７㎝間隔で接合痕が観察されるが、概ね５㎝幅が基本単位となっている。接合痕を見ると凹線状に明瞭に痕跡が残る接合部位と、綿密な器面調整が行われている接合部位があり、成形における作業単位を示すものと思われる。

部位的な特徴としては、底部は裾が外にやや張り出す形状を見せるが、これは粘土紐接合時の強い指押さえによるもので意図したものではなかろう。口縁部はやや内傾させ、上端部に面取りを行っている。また、粘土の折り返しにより外端部を肥厚させる玉縁状口縁となっている。口縁部の内傾は蓋口縁の外反と傾斜度を一にしており、意匠として成形されたものである。本例のように口縁部を内傾させるもの、もしくは段を有して被せ蓋の受け部をつくり出すものは、銅製・土製・陶製・瓦製問わず経筒もしくは経筒外容器にしばしば見られる形態であり、本資料もその一例であろう。

器面調整については、内面は板状工具による横方向、斜め方向のハケ痕が明確に残っている。外面は縦方向のハケ調整が基本となっているが、全体的に大まかにナデ消されている。

全体的に見ると、本資料は器壁の薄さなど精巧なつくりと言って良いが、器面調整や接合痕の処理などは大雑把に仕上げられており、どこかちぐはぐな印象を受ける。なお、筒の内底面、蓋の天井部内面に紙本経等が存在したことを窺わせる痕跡は残っていない。

【土師器皿15点（１～15)】(図36～38、写真84～86、表６）

土師器皿15点は全て完形または完形に復元される資料である。土製経容器同様全く風化を受けておらず、由来記録書に記されているように経容器内に重ねて納入されていたのであろう。

15点とも形態に差はなく、糸切りされた平底の底部を持ち、体部は外反しながら大きく外方に広がり口縁に至る。口縁端部は指ナデにより明確に面を形成するものとやや丸みをおびるものがある。口径は7.9～8.7㎝、底部径は4.5～5.1㎝、器高は1.6～1.95㎝の範囲に収まる。

これらの土師器皿の内、11と15は口縁部の煤痕から灯明皿としての使用が認められる。しかしながら、煤痕の状態から灯明皿としての使用は１回に限られるようであり、これらの土師器皿が経容器埋納に関連して生産・使用されたこと想像させる。逆に述べれば、口縁部に明確な煤痕の観察できない土師器皿は、灯明皿以外の用途で使用されたと考えられるため、写経後、埋経に至るまでの供養行為を考察する上で極めて重要な考古資料となろう。

本資料の所属年代に関しては、山口県東部、島田川流域における古代から中世にかけての土師器編年が確立されていない現状で多くを語り得ないが、遠く周防国府跡に目を向けると吉瀬勝康氏により12世紀代に位置づけられている周防国府跡SK2000、SE6780出土の土師器皿[註18]が本資料と年代的にほぼ並行関係にあるものと思われることから[註19]、現状としては12世紀中頃を中心に土師器皿の年代を考えておきたい。この年代観は列島における経塚造営の初期繁栄期に当たり、上述したようにこれらの土師器が生産から埋納までほぼ時間差がないものと、換言すると供養行為を経て経塚（経容器）に埋納することを目的に生産されたと考えるならば、遺跡の所属年代を直接的に示す資料となり得るものである。周辺域での同時代の遺跡調査が進行すればその位置づけがより明確化されるであろう。

図 35　土製経容器実測図

写真 83　土製経容器蓋・身

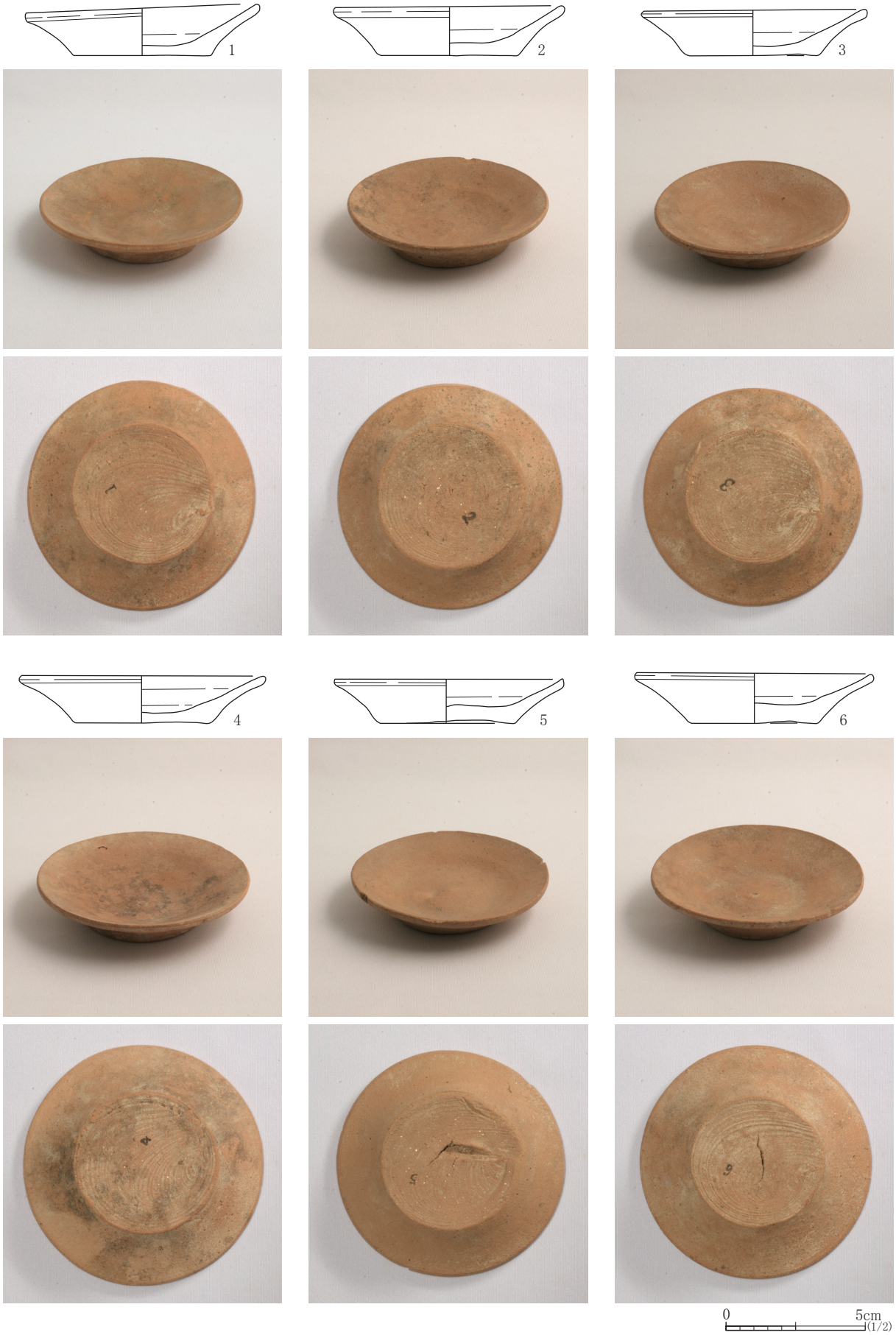


図 36・写真 84　土師器皿 1 ～ 6

図 37・写真 85　土師器皿 7 ～ 12

図 38・写真 86　土師器皿 13 ～ 15

0　5cm (1/2)

表6 出土遺物観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
a	丘陵傾斜地(経塚か)	土製経容器　蓋	1/2欠失	①(21.2)　③3.8 撮み径4.0	①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	密 金雲母極少量混ざる	天井部外面板目圧痕
b	丘陵傾斜地(経塚か)	土製経容器　身	上部のみ1/2欠失	①(19.4)　②20.4 ③39.9	①②にぶい橙色(7.5Y7/4)	密 金雲母極少量混ざる	
1	経筒内	土師器　皿　1	完形	①8.3　②4.9　③1.8	①②にぶい橙色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
2	経筒内	土師器　皿　2	完形	①8.1　②5.0　③1.8	①②にぶい橙色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
3	経筒内	土師器　皿　3	完形	①7.9　②4.7　③1.65	①②にぶい橙色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
4	経筒内	土師器　皿　4	完形	①8.6　②4.9　③1.7	①②にぶい橙色(7.5Y7/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
5	経筒内	土師器　皿　5	完形	①8.1　②4.8　③1.6	①②にぶい橙色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
6	経筒内	土師器　皿　6	完形	①8.4　②4.5　③1.8	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
7	経筒内	土師器　皿　7	完形	①8.5　②5.1　③1.8	①②にぶい橙色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
8	経筒内	土師器　皿　8	完形	①8.4　②5.0　③1.7	①②にぶい橙色(7.5Y7/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
9	経筒内	土師器　皿　9	完形	①8.5　②5.0　③1.7	①②にぶい橙色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
10	経筒内	土師器　皿　10	完形	①8.2　③4.8　③1.85	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
11	経筒内	土師器　皿　11	完形	①8.35　②4.7　③1.8	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	灯明皿 底部糸切り
12	経筒内	土師器　皿　12	完形	①8.7　②5.0　③1.8	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
13	経筒内	土師器　皿　13	完形	①8.3　②4.9　③1.9	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
14	経筒内	土師器　皿　14	完形	①8.6　②4.9　③1.8	①②にぶい橙色(7.5Y6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	底部糸切り
15	経筒内	土師器　皿　15	完形	①8.3　②4.7　③1.95	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	精緻 金雲母少量混ざる	灯明皿 底部糸切り

4. 器種の特定

本稿では当資料が経巻を納入する容器、即ち「経容器」であることを前提にここまで報告を進めてきたが、銅製以外のもので経筒と呼称される容器が「骨蔵器」である可能性を有することは古くより指摘された事[註20]であり、特に九州における陶製転用経筒においては、骨蔵器による使用か経筒による使用か判別に苦しむ場合が多い[註21]。確かに当資料のように内部に何ら経巻の痕跡を有せず、共伴遺物も土師器皿のみのものを経容器と断定するのは困難と思われる。さらには、当資料のように径、器高とも経筒としては極めて大型の部類に属する容器が単独で出土する場合は経筒外容器として報告される場合が多い。果たして当資料を埋経のための容器と認定して良いものであろうか。

まずは事実関係を再確認したい。当資料は、花崗岩質の地山を僅かに掘り込み埋納され、内部には土師器皿が重ね入れられていたとされる。経筒は石室状の空間に木炭等を詰め、除湿効果を高めた上で納める例が多いものの、何ら外郭施設を設けず埋め置かれる場合も散見されるため、本資料の発見状況をもって経容器・骨蔵器の判別はつけがたい。重要視すべきは土師器皿の納入状況であろう。由来記録紙には「重ねられて」としか記されていないが、土製容器の径から土師器皿を安定して納入するには1段または２段で重ね入れる他方法はない。試しに15枚の土師器皿を１段に重ねてみると、その総高は14㎝もの高さとなり、容器に入れた際にも周囲の空間が広く不安定な状態となる。一方２段に分けて重ね置かれたと考えると各段はおよそ７～８㎝の高さとなり、この状態で土製容器に納入されていたと仮定すると容器内にはなおも直径約18㎝、深さ30～31㎝の余剰空間が存在することになる。

さて、一般写経における料紙の天地幅は通常約28㎝前後で、経塚から発見される経巻の天地幅は平安時代のものは大体これに近く、時代が降るとともに短くなることは既に周知のところである[註22]。経巻の天地幅は即ち経筒の身部高を規定する要素となる。当県において経巻が遺存していた例を見ても、鋳銅製経筒が発見された阿武郡阿武町所在の御山神社経塚[註23]では筒身高26.0㎝の経筒に天地幅25㎝の法華経８巻が納められており、同じく鋳銅製経筒が出土した防府市所在の日輪寺経塚[註24]においても筒身高20.6㎝の経筒に天地幅19.5㎝の法華経８巻が納められている。この様に経筒は経が納入できる容積さえ満たしておればその本来的な役割を果たし得るのであり、余剰空間を必要としないものである。これは銅製経筒に限らず土製等の専用経筒においても同様であろう。

以上の点を重視すると、相ヶ迫出土の土製容器内に想定される深さ約30㎝の空間は、その容積からやはり経巻を納入するためのものと考えて良いのではなかろうか。ただしこの場合においても本資料が「経筒」であるのか「外容器」であるのかに問題を残す。相ヶ迫出土品は、発見時の状況から想像するに埋納後、後世に内容物の一部が抜き取られたとは考え難いが、経筒には現在まで金属製品、陶磁・土製品、石製品、そして木製品の存在が知られており、組成容器内に有機質の経筒が存在した可能性を否定できない[註25]。現状では当資料に対して「経容器」という名称を与えておくに止めたい。

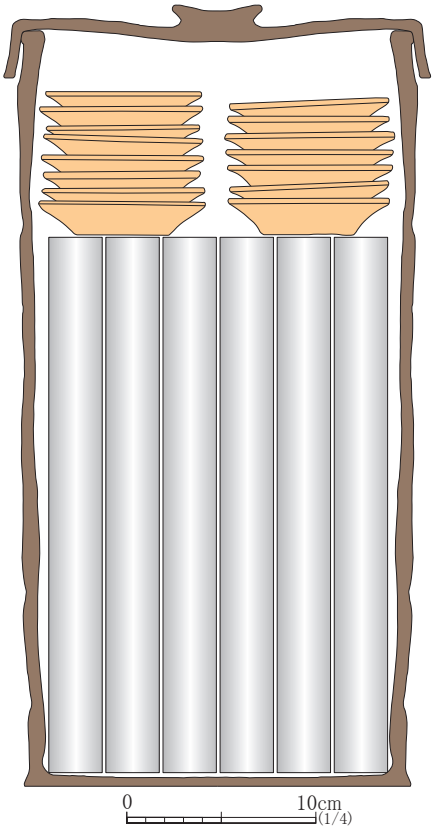


図 39 紙本経・土師器皿納入模式図

5. 山口県出土の土製経容器

現在山口県で確認されている土製（土師質）経容器は、当資料以外では真尾猪の山遺跡（防府市大字真尾）Ⅳ地区出土品[註26]、平原経塚（周南市大字戸田）出土品[註27]、中宮経塚（下松市大字河内）出土品[註28]の３例を数えるのみである。資料数が極めて限られる状況ではあるが、細身で法量が銅製経筒とさほど大差ないもの（仮称**A類**：図40−６・７）と、太身で法量の大きいもの（仮称**B類**：図−８・９）に大別しておく。

山口県に出土する経筒（経容器）資料については、過去に山口県内の経塚遺物を概観した柏本秋生氏により「鋳銅製経筒は、九州の影響を受けて在地でつくられたと考えられるものが多く、直接九州から移入されたと考えるものは少ない。いっぽう、貿易陶磁器も多数用いられている。種類からみて、九州からもたらされたものと思われる。地理的な関係もあり、やはり九州的な経塚造営が行われていたとみるべきだろう[註29]。」と指摘されている。

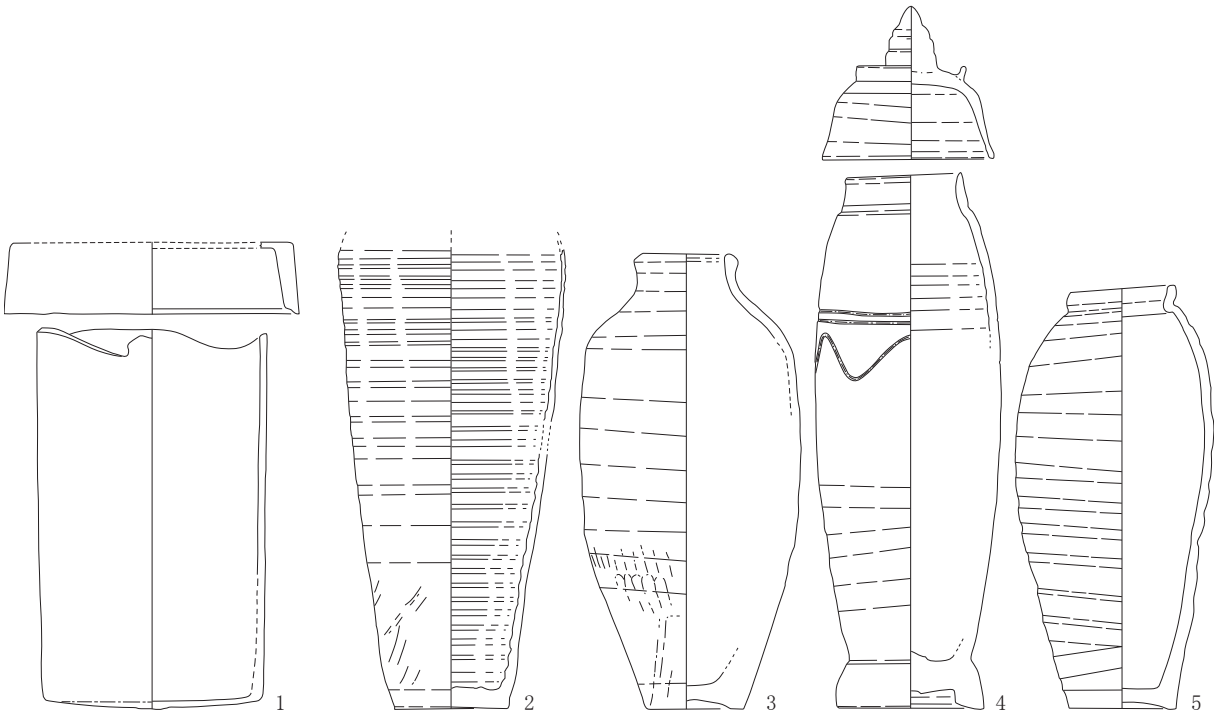
確かに古く小田富士雄氏によって「九州型経筒[註30]」として位置づけられた鋳銅製積上式経筒に関しては、伝承品であるが長門一の宮（下関市一の宮本町）から二段積上式の経筒[註31]が、同じく伝承品であるが松尾山光明寺天皇院経塚（防府市大字真尾）から四段積上式の経筒[註32]が出土したとされており、九州北部地域との強い関係が想像される。この他にも、福岡県を中心に九州北部に分布するもので、鋳銅製経筒で筒身の上・中・下部３ヶ所に突帯を巡らし、宝珠鈕の付く被蓋式傘蓋を有する等の特徴をもつタイプのもの[註33]が広沢寺経塚[註34]（山口市黒川）から出土しており、広沢寺例と同様のタイプが２口、松尾山光明寺天皇院経塚[註35]から出土したと伝えられる[註36]。

同じく小田富士雄氏により「九州型経筒」として位置づけられた陶製経筒に目を向けると、山口県内では小田氏分類によるⅠ類、Ⅱ類ともに散見される状況にある（図40−２～５）。霊仙寺跡（佐賀県吉野ヶ里町）の調査成果から小田氏分類に検討を加えた杉山洋氏の分類案を引けば、長谷経塚（宇部市大字西岐波）出土品はⅠ類Ａ、東分中村経塚（美祢市大嶺町）出土品はⅡ類Ａ、王子の森墳墓群（山口市朝田）採集品はⅡ類Ｃに該当する資料である。また、上野経塚（長門市油谷向津具上）出土の陶製経筒３口の内１口はⅡ類Ｃ、他２口は四耳壺であるが、九州北部によく見られる経筒に転用された宋時代の長胴壺にその系譜が求められる。

この様に、県内全ての鋳銅製・陶製経筒（経容器）が九州北部の影響下に搬入・製作されたとまでは言えないが、柏本氏の指摘通りその強い関係性は首肯されよう。それでは、土製経容器に関しては如何なる傾向が見出せるであろうか。

まずＡ類に関しては、類例は妙楽寺経塚群（大分県宇佐市）採集品[註41]や、（伝）求菩提山経塚（福岡県豊前市）出土品[註42]など、やはり九州北部に散見される。しかし、「印籠蓋造り」土（瓦）製経筒については香川県、徳島県など四国地域の経筒口縁部の特徴との指摘[註43]もあり、一概に九州北部との関係のみで捉えることはできない。

Ｂ類に関しては、平原経塚出土品（図40−８）と小周防相ヶ迫出土品（図40−９）との間に形態差が大きい。まず平原出土の筒身は、器高約40㎝、口径約25㎝と小周防相ヶ迫例よりひとまわり大きく、器壁も分厚い。口縁端部は段こそ有さないものの明確に内傾させている。報告者の指摘[註44]にもあるが、蓋は土師器坏を逆さまにしたものに宝珠形のつまみを付加したものである。山口県内では唯一の経容器形態であるが、参考となる資料にやはり四国地方、香川県、徳島県に分布する瓦製・土製経筒、外容器が挙げられる。近年、片桐孝浩氏により香川県出土の十瓶山窯産の瓦質経筒外容器（瓦質筒形土器）の分類・編年案が提示されている[註45]。氏は口縁部形態により段状の受け部を持つⅠ類と、口縁端部が体部からそのまま方形に終わらせるⅡ類とに分類し、外面に施されている調整を基準にⅠ～Ⅴ期に編年しているのであ



【銅製経筒】
1 立野経塚（光市大字立野）

【陶製経筒】
2 東分中村経塚（美祢市大嶺町）
3 東分中村経塚（美祢市大嶺町）
4 長谷経塚（宇部市西岐波）
5（伝）王子の森経塚（山口市朝田）

【土製経容器】
6 中宮経塚（下松市大字河内）
7 真尾猪の山遺跡Ⅳ地区（防府市大字真尾）
8 平原経塚（周南市大字戸田）
9 小周防相ヶ迫（光市大字小周防）

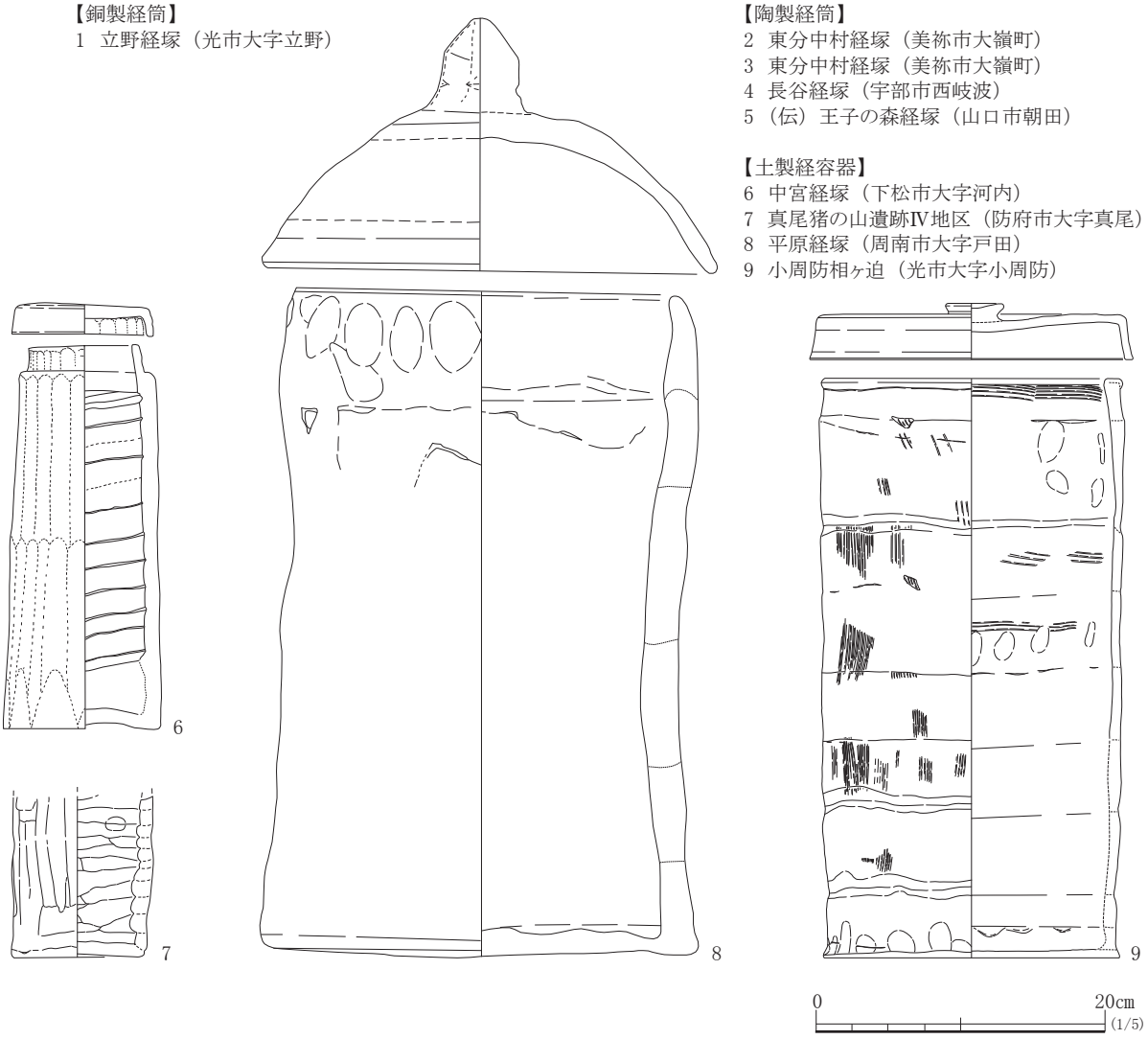


図 40 山口県出土の経容器

るが、平原経塚出土の筒身は、法量の差こそあれⅡ類の後半期（片桐氏のⅣ・Ⅴ期）の形態に極めて近い。片桐氏はⅣ期を12世紀第４四半世紀、Ⅴ期を13世紀の第１四半世紀に比定しているが、平原経塚に関しては蓋の形状が13世紀代の坏に近似することから同時期の年代が示されている。[註46] 土師質、瓦質の差は看過できないものの、形態的特徴、年代から四国東部瀬戸内沿岸との関係も指摘しておきたい。

一方、小周防相ヶ迫出土品は、口縁部を内傾させる形態は同様であるものの、平原経塚出土品に比して器壁も薄く、極めてシャープなつくりとなっている。蓋も専用蓋として作製されており、両者を大型土製経容器（Ｂ類）として一括することに躊躇を覚える。所属時期に関しても、小周防相ヶ迫出土品は共伴する土師器皿から12世紀中頃にその時期を求められ、平原例と時期的に乖離する可能性が高い。現状では、近接地から出土した立野経塚出土鋳銅製経筒（図40-１）との形態的な類似から、「銅製経筒模倣の土製経容器」と位置づけたい。

6. おわりに

以上、当館出土の土製経容器について資料紹介とともに若干の考察を行った。山口県内に限らず、経塚遺物は古くに発掘されたものが多く、また出土品が国立博物館蔵、寺社仏閣蔵、個人蔵品である場合も多い。特に今回取り扱った平安時代末～鎌倉時代初頭の初期経塚に関しては、県内の新規発見も稀であることから、考古学研究の対象にし難い部分も多かったものと想像される。筆者も経塚及びその遺物に対して甚だ浅学であり、事実誤認等あればお詫び申し上げる次第である。

本稿を成すにあたり古賀信幸氏（山口市史編さん室）には貴重な経塚データをご提示いただいた。末筆ではあるが記して感謝の意を表したい。

［註］

1) 昭和30年（1955）に光市に編入。

2) 文献27の８頁に遺物写真を公開している。

3) 真尾猪の山遺跡Ⅳ地区（防府市）出土の土師質経筒の報告においても、「山口県内出土の土師質の経筒は周南市平原経塚、下松市中宮経塚の２例である」と記されている（文献26の85頁）

4) 文献９の99項

5)『島田川』には本資料に関する記述は見られない。これは『島田川』巻末に所収されている附録が「山口縣先史時代遺跡遺物発見地名表（1950年以降）」とあることから見て、あくまでも調査の対象を先史時代に限定した結果と考えられる。

6) 弘律之進氏については、山口大学島田川遺跡調査団の一員とも想像したが、『島田川』に記されている踏査協力メンバーにも名が見られないため、地元住民と想像しておく。

7) 文献32ａ・ｂ

8)『周防国玖珂郷戸籍』（石山寺蔵）には秦氏と称する戸主が五人、戸口に二十数人あるとされる（文献32a）。

9) 文献32ｂの109～118頁

10) 文献31の92頁

11) 養老五年（721）に熊毛郡が二郡（熊毛・玖珂）に分割された際に熊毛郡家は小周防から去り、熊毛郡大野（平生町）に移されたと解されている（文献29）。

12) 明治９年(1876)に小周防東・西小学校が統合され現在地付近に移転し、昭和22年(1947)には周防村立周防小学校と改称。昭和30年(1955)の光市編入に伴い光市立周防小学校と改称。

13) 昭和42年(1967)に三島中学校と統合し島田中学校へと移転。

14) 昭和４年(1929)に発行された『防長和鏡の研究』の著者である弘津史文氏は、周防村字立野小字堂ノ森経塚について「著者

は大正五年此の地を調査し経塚なるべしと発表せし事あり」（文献29の43頁）と記しており、発掘以前より地元考古学研究者には周知されていたものと考えられる。

15) 文献22

16) 文献11a

17) 素焼製壺の実物が現存せず、写真・実測図の類も確認できないため、あくまでも推定である。実際には経筒蓋径より外容器径が小さかったため、埋納時に経筒身→外容器→経筒蓋の順に重ねたのかも知れない。

18) 文献37

19) 周防国府出土土師器皿は本資料とは異なり体部が内湾しつつ広く外方に立ち上がる形態のものが目に付くが、口径・底部径・器高から見ると本資料と周防国府跡２遺構出土の土師器皿はほぼ同形と言える。

20) 文献３3aの277頁

21) 佐賀県東背振村（現：吉野ヶ里町）に所在する霊仙寺跡では経塚群とともに墓域が検出されているが、両者に用いられた陶製容器には明確な差が見いだせない（文献28)。

22) 文献36aの81頁

23) 文献10・38

24) 文献30a、ｂ・36ｂ

25) 現在までに確認されている木製経容器には、和歌山県高野山奥之院経塚、京都府花背一号経塚、福岡県四王寺山第一経塚、山形県遊佐町金俣経塚出土例が挙げられるが、これらは銅製・陶製経筒の内筒と見なされている（文献33b)。一方『如法経現修作法記』（嘉禎二年（1236）宗快撰）の「如法経筒奉納次第」には「～(略)～筒銅、或又用竹筒」と記されているが、京都府福知山市に所在する大道寺経塚で竹製経筒が２点出土しており、同じく福知山市高田中世墓・経塚群からは３点の竹製経筒の存在が確認されている（文献18)。前者は13世紀後半、後者は12世紀後半から13世紀初頭にその所属時期が求められているが、これらの竹製経筒は形態が銅製経筒と酷似していること、また外容器への埋納状況から明確に「経筒」と位置づけられている。

26) 文献26

27) 文献4・34

28) 文献11ｂ

29) 文献11ｂの712頁

30) 文献7ｃ

31) 文献11ｂ

32) 文献8　※実測図未公開

33) 杉山洋氏は、以下の特徴を有するものを「四王寺山型経筒」として設定している。「①筒身部に三本の突帯がある。突帯は断面台形の幅広いもので、突帯上に一条もしくは二条の沈線を入れることによって、二重もしくは三重の突帯となる。特に中段の突帯は、太い突帯の上下に細い突帯が接して付く、三重の突帯となる。②筒身部下端の高台が、横に張り出し台形に近い断面形をなす。多くは下段の突帯が高台に接しているため二段に張り出しているようにみえる。③蓋は被蓋式傘蓋となる。蓋端は身受け部から外側へ大きく外反しながら張り出す。先端部に小さな孔をあけ、瓔珞を垂下するものがある。また蓋の平面形を六角形とし、各頂点から瓔珞を垂下するものもある。④蓋の頂部には宝珠鈕が付く。宝珠は、円錐形の比較的太い頸の上に、平面円形の請花と宝珠をのせる。⑤鈕の下、蓋の頂部に、鈕台と呼ぶ部分を持つ。一段高くするものと、突帯を円形に巡らせるものとがある。」（文献23ｄ）

34) 文献1・15a・25・30a　※実測図未公開

35) 文献8　※実測図未公開

36)『山口県史 資料編考古２』の文中において柏本秋生氏は広沢寺経塚出土経筒を「四王寺型経筒」と認定しているが、広沢寺例・松尾山光明寺天皇院例ともに見られる下段突帯が高台部から上方に離れて付く形態は、「四王寺型経筒」の登場と時を同じくして出現したと杉山洋氏が指摘し提唱した「永満寺型経筒」の特徴に近い（文献23ｄ）。

37) 文献20

38) 文献13

39) 文献35

40) 文献3・15a・30　※実測図未公開

41) 瓦製と報告されており、蓋も発見されていないが、器形・法量とも中宮経塚出土品と酷似している（文献21）。

42) 奈良国立博物館蔵品であり、実測図の公開はされていないようであるが、「印籠蓋造り」「土製（瓦製）経筒」など共通点が多く、法量も類似している（文献３）。

43) 文献21

44) 文献34

45) 文献12

46) 文献4

［文献］

1) 石川卓美（1972）『平川文化散歩』，山口市平川公民館，山口

2) 井口喜晴・高橋照彦（2000）『経塚出土陶磁展６ 九州地方に埋納されたやきもの』,奈良国立博物館・（財）佛教美術教会(編),奈良

3) 井上喜久男・井口喜晴・高橋照彦（1999）『経塚出土陶磁展 中国・四国地方に埋納されたやきもの』,愛知県陶磁資料館,瀬戸（愛知）

4) 岩崎仁志（2004）「平原経塚」，山口県（編）『山口県史　資料編考古２』，山口

5) 大林達夫（2001）「井上山２号経塚」，防府市教育委員会（編）『井上山経塚・下山ノ口遺跡発掘調査報告書』（防府市埋蔵文化財調査報告0111），防府（山口）

6) 奥村秀雄（1979）「経塚」，『新版考古学講座　第８巻特論・上』，雄山閣，東京

7) a：小田富士雄（1966）「九州発見の陶製経筒」，日本歴史考古学会（編）『日本歴史考古学論叢』，吉川弘文館，東京
b：小田富士雄（1968）「西日本の石製経筒」，日本歴史考古学会（編）『日本歴史考古学論叢２』，雄山閣，東京
c：小田富士雄（1970）「九州の経塚」，佛教藝術學會（編）『佛教藝術』76号，東京

8) 小野郷土史研究会（1988）『ふるさと小野』創刊号，防府（山口）

9) 小野忠熙・荒木清一・福尾猛市郎・浜田清吉・岡村義彦（1953）『島田川 周防島田川流域の遺跡調査研究報告』，山口大学島田川遺跡学術調査団，山口

10) 柿本春次（1975）「御山神社経塚」，山口県文化財愛護協会事務局（編）『山口県文化財』第5号,山口

11) a：柏本秋生（1986）「Ⅱ立野経塚出土の銅製経筒」，山口大学考古学研究室（編）『ＲＥＬＩＣＳ』第３号，山口
b：柏本秋生（2004）「経塚関係遺物」，山口県（編）『山口県史 資料編考古２』，山口

12) 片桐孝浩（2004）「経塚出土の陶磁器－四国地域の様相－」，日本貿易陶磁研究会（編）『貿易陶磁研究』24号，東京

13) 河本芳久（2000）『東分中村経塚』，美祢市教育委員会，美祢（山口）

14) 河本芳久・篠田忠夫・池田善文（1983）『南原寺遺跡　第一次発掘調査概報』，美祢市教育委員会，美祢（山口）

15) a：蔵田蔵（1966）「経塚論 10.東京国立博物館保管、中国地方出土の経塚遺物」，東京国立博物館（編）『MUSEUM』NO.178，東京

b：蔵田蔵（1976）「経塚の諸問題」,『世界考古学大系４　日本Ⅳ歴史時代』第２版，平凡社，東京

16）黒川眞道（1897）「銅製経筒の説」,『考古学会雑誌』第２編第５号，東京

17）桑原邦彦（1978）『物見山経塚』（山口県厚狭郡山陽町埋蔵文化財報告第３集　物見山経塚調査団（編）），山陽（山口）

18）小池寛（1994）「竹製経筒の復元について－漆を塗布した竹製経筒の新例－」,土橋誠（編）『京都府埋蔵文化財情報』第52号，向日市（京都）

19）斎藤忠（1968）「第八章　経塚及び関係遺跡」,『日本古代遺跡の研究　総説』，吉川弘文館，東京

20）佐伯敬紀・中村博行（1968）「第２章第４節 経塚とその他の遺物」,「宇部の遺跡」編集委員会（編）『宇部の遺跡 宇部市域遺跡群学術調査研究報告書』，宇部（山口）

21）佐藤良二郎（2008）「大分県宇佐市妙楽寺出土経筒」,小田富士雄・平尾良光・飯沼賢司（編）『経筒が語る中世の世界』（別府大学文化財研究所企画シリーズ①「ヒトとモノと環境が語る」),思文閣出版,京都

22）島田貞彦（1917）「周防国熊毛郡周防村立野経塚に就て」,『考古学雑誌』第８巻４号，東京

23）a：杉山洋（1983）「熊野三山の経塚」,奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会（編）『文化財論叢』,京都

b：杉山洋（1983）「同形態経筒について－佐賀県市丸経塚を中心として－」,『古代文化』第35巻３号，京都

c：杉山洋（1985）「太宰府の経塚」,（財）古都太宰府を守る会（編）『太宰府の歴史』４，福岡

d：杉山洋（1985）「四王寺型経筒」，東京国立博物館（編）『ＭＵＳＥＵＭ』NO．413，東京

24）関秀夫（1984）『考古学ライブラリー24　経塚地名総覧』，ニュー・サイエンス社，東京

25）高橋健自（1907）「経筒沿革考」,『考古界』第６篇第８号，東京

26）谷口哲一・吉中雅信・川本晃・岩田謙治・山本寛子（2008）『真尾猪の山遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財センター調査報告第64集，山口県埋蔵文化財センター，山口

27）田畑直彦・中村仁美（2001）『山口大学埋蔵文化財資料館収蔵考古資料－出土品にみる山口県の歴史』，山口大学埋蔵文化財資料館，山口

28）田平徳栄・直塚員幸・杉山洋他（1980）『霊仙寺跡』（東背振村文化財調査報告書第４集　田平徳栄・直塚員幸（編）），東背振村（佐賀）

29）布引敏雄（1975）「第四編 古代・中世の光」，光市史編纂委員会（編）『光市史』，光（山口）

30）a：弘津史文（1929）『防長和鏡の研究　附 防長の経塚』，山高郷土史研究会，山口

ｄ：弘津史文（1939）「周防桑山西峯の経筒と保延六年奥書銘法華経」,『考古学雑誌』第29巻８号，東京

31）福島朝子（1986）「山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の新羅系等質土器について」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』，山口

32）ａ：福本幸夫（1975）「第二編 原始時代の光」，光市史編纂委員会（編）『光市史』，光（山口）

ｂ：福本幸夫（1966）『先史時代の光市』，福本幸夫（編），光（山口）

33）a：保坂三郎（1971）『経塚論考』，中央公論美術出版，東京

b：保坂三郎（1977）「Ⅲ経塚　経塚概論」,『新版仏教考古学講座　第６巻教典・経塚』，雄山閣，東京

34）前田耕次・岩崎仁志（1984）「徳山市平原経塚」,山口県文化財愛護協会事務局（編）『山口県文化財』第14号,山口

35）村岡和雄・伊藤佳恵（1979）『山口市王子の森墳墓群』（山口県埋蔵文化財調査報告書第51集　山口県教育委員会文化課（編）），山口

36）a：三宅敏之（1977）「経塚の遺物」,『新版仏教考古学講座　第６巻教典・経塚』，雄山閣，東京

b：三宅敏之(1965)「周防国日輪寺経塚遺宝」,『考古学雑誌』第50巻３号，東京

37）吉瀬勝康（2004）「４ 集成図 土師器 １．７世紀～13・14世紀の様相」，山口県（編）『山口県史　資料編考古２』，山口

38）渡辺一雄（2004）「御山神社経塚」，山口県（編）『山口県史　資料編考古２』，山口